

# 集団意思決定の社会的構成主義による考察

城 川 俊 一

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 社会的構成主義とは何か
- 3 集団意思決定における社会的構成主義
- 4 今後の課題
- 5 参考文献

## 1. はじめに

社会科学の領域で、近年、従来の法則定立的かつ要素還元的思考に取って代わる新しい考え方が台頭してきた。その1つに社会的構成主義 (social constructivism) がある。社会的構成主義は、簡単に述べると、「現実を、そこに生きる人々が言語を用いることによって構成されたものとして理解することが可能であり、そうすることにより、現実をワン・ショットでとらえ、そこに普遍性や不変性を見出そうとする静態的な理解から脱却し、現実における生成と変容の動態性を描き出していくことが可能である」(木村 2001) ようなアプローチである。このアプローチは、思想的には、20世紀の科学を特徴付けるモダニズムへのアンチテーゼであるポストモダニズムとして位置付けられる。モダニズムは、「世界を人間の意識と物理的世界に切り離し、世界を唯一絶対の原理によって説明できる」(高橋 2005 p.73) という命題に見出されるという認識に基づいている。一方、ポストモダニズムは、モダニズムの科学的方法論に対する懐疑・反省から「世界を法則性や客観性や究極的な真理として見る見方から、人間の意識・言語・歴史・文化の面から見る」アプローチである。また、「社会的構成主義は、ポストモダニズムとポスト構造主義を背景としている」(高橋 2005 p.73) ということから、レヴィ=ストロースに始まる構造主義 (constructivism) —実存世界の諸形態の裏に潜む法則や構造を見る見方—もポストモダニズムの観点から否定される。

80年代以降、社会的構成主義は、構成主義批判として登場した。それでは、その両者の違いは何であろうか。構成主義は、ピアジュの構成主義と言われる。一方、社会的構成主義は、その起源をヴィゴツキーに遡ることが出来る。ピアジュは知識の構成を生物学的・心理学的メカニズムに求め、ヴィゴツキーは、知識の構成を社会的相互作用に求めた。つまり、構成主義が、個々の学習者が自分自身の認知器官により、物や自然を対象に、いかに知識を構成するかに関心があるのに対して、社会的構成主義は、学習に影響を与える社会・文化・他者などの社会的要因に焦点を当てている。社会的構成主義では、学習とは、人々がコミュニケーションに参加して、そこでのアイデンティティを確立する過程である。

この様に社会的構成主義により、現実が社会的に構成されるという視点から、社会システムとしての組織やそこで行われる集団意思決定もまた社会的に構成されると言える。以上の観点から、本論文の構成は、まず第2節で、社会的構成主義とは何かを述べ、第3節で、社会的構成主義の視点から、集団意思決定を再構成し、最後に、第4節で、今後に残された課題を述べる。

## 2. 社会的構成主義とは何か

### 2-1 社会的構成主義の前提

Burr (1995)によると、社会的構成主義の立場を特定化する唯一の特徴は存在しないとされるが、ここでは便宜的に、ガーゲン (2004) による、社会的構成主義の5つの中心的前提を取り上げる (ガーゲン 2004 pp.62-68)。

1) 世界や我々自身を説明する言葉は、その説明の対象によって規定される。

この第1前提は、部分的には、言語の対応理論—真理は、文・言明・命題等と事実との対応 (correspondence) にあるとする理論—や、観察から一般命題を導出する帰納論理を打ち立てることの不可能性に基づいている。これは、現代科学論の視座では、「何でもあり」というファイアーベントやクーンたちによる理論間の「通約不可能性 (incommensurability)」—科学史家のクーンによって科学哲学的概念として使用され、諸理論間の比較が線上の大小関係のようにはいかず、共通の尺度によっては測れないこと—の立場によっているとも言える。

2) 世界や我々自身を理解するための言葉や形式は、社会的産物である。

すなわち、それらは歴史的・文化的に埋め込まれた、人々の交流の産物である。

この第2前提によれば、社会的構成主義にとって、記述や説明はあるがままの世界の産物ではなく、人間行為の調整の産物であり、言葉は進行する関係性の文脈の中でのみ意味を持つものであると言える。

3) 世界や自己についての説明がどの位の間支持されるかは、その説明の客観的妥当性ではな

く、社会的過程の変遷に依存して決まる。

この第3前提は、クワイン＝デュエムの仮説—言外に補助的命題をどんどん付け加えていくことにより、理論は、そうでなければ理論を棄却することになったであろう多量の観察にもかかわらず、支持され続ける—に基づいている。だからといって、このことは、科学者の信頼性や科学的営為の社会的価値を否定するものではない。

4) 言葉の意味は、言語が関係性のパターンの中で機能するあり方の中にある。

この第4前提が言わんとしていることは、言葉の意味が、広範な社会生活のパターンに埋め込まれたミクロな社会的交換から生ずるということである。

5) 既存の言説形式を吟味することは、社会生活のパターンを吟味することにほかならない。

こうした吟味は、他の文化集団に発言力を与える。

この第5前提は、ある主張の「経験的妥当性」の吟味は、その中核的命題群を共有する共同体の中でのみ行われ、その共同体の外では、その吟味は困難であることを言っている。従って、重要なのは、その困難性にもかかわらず、様々な中核命題群を、その外側から批判的に吟味し、そうした中核的命題群が、より広範な社会生活にいかなる影響を与えるのかを探求することである。

## 2-2 社会的構成主義とディスコース

### 2-2-1 ディスコースの定義

ここでは、Burr (1995 p.48, 訳 p.74) によるディスコース (discourse) の定義を示す。「ディスコースとは、何らかの仕方でまとまって、出来事の特定のバージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々を指している。」あるディスコースが「真理」として受け取られ、他のディスコースが排除されるのは相対的にパワーに関係している (高橋 2005 p.83)。また、「ディスコースとは何よりも社会行為主体の言語活動であるが、たんなる事柄の陳述でなく、理論化を指向した対象の記述であり (cognitive statement)、批判的吟味を遂行する限りでのコミュニケーションであり (reflexive communication)、他者に対する当為の要求 (normative assertion) である。」(臼井 2003 p.47) したがって、ディスコース分析は、社会的構成主義の研究に大きな影響を与えている (Potter et al., 1990)。

### 2-2-2 言語とディスコース

Foucault (1972, 1976), Parker (1992), Hollway (1984) らの研究によれば、言語の構造化はディスコースによって行われ、言葉の意味はそれが用いられるディスコースのコンテキストによって決定される (高橋 2005 p.80)。言語は、社会的構成主義にとって決定的に重要な概念である。

言語は、すでに社会的な存在である。ソーシャルからラカンに至る構造主義の系譜を辿れば、言語は他者に属する。そしてその他者に属する言語に従属することを通じてのみ、主体は存在する。ダンジガー（2005）は、言語と近い概念としての「カテゴリー」に関して、その社会的構成主義のアプローチを取っている。ダンジガーの視点からは、心理学的カテゴリー（認知や情動、学習、動機づけ、パーソナリティー、態度、知能など）は、自然種（natural kinds）でなく、人工種（human kinds）であるとした。ここで、自然種を規定するものとし、ダンジガーは、2つの基準を上げている（ダンジガー 2005 p.142-150）。ひとつは、研究者（この場合は心理学者）の努力からは独立であること。2つ目は、同じ種に属している諸現象のあいだには本質的な類似性があることである。ひとつめの基準が、心理学的カテゴリーは研究者に依存しているので、心理学的カテゴリーが自然種でないことは容易にわかる。一方、2つ目の基準は、説明を要する。つまり、2つ目の基準は、「自然の区分とは、唯一の正しい表象のみを許すような種類の区分であり、それ以外の表象はすべてこの唯一の真理からの逸脱である」というものである。しかし、区分自体は、それによって構成した対象しか表象することができない。このことは、用語の意義（字義）（sense）と指示対象（reference）の問題を含んでいる。一般に、区分により用語の意義が決まり、同時に指示対象も確定する。「丸い机」や「白い犬」は誰でも見えるものであり、あれがそうだと指差すことが出来る。しかし、「知能は知能検査が測定するものである」というとき、「知能」という用語に特定の支持対象を与えるが、知能とは本当は何かというその字義ははまだ未定である。その意味で心理学的カテゴリーは自然種ではない。社会的構成主義には、言語と実在の問題が常に付きまとう。この問題に対して次のような解釈がある。

「実証主義の立場から社会的構成主義に向けられた批判の典型は、社会的構成主義は、厳然と存在する現実を前に、ばかげた主張をしているというものである。具体的には、次のような様々な批判がある。「火のついたマッチをガソリンの容器に入れても、その結果は分からないと言うつもりか?」、「世の中に、貧困、病気、飢餓が存在しているのを、否定するのか?」、「死は、明らかに、人間存在の一部である。それが社会的構成の産物とは、まったくナンセンスだ。」、「世界が実在しないと云うつもりか?世界は、社会的でつちあげの産物とでも言いたいのか?」。いずれも、社会的構成主義に対する誤解の結果である。まず、社会的構成主義は、爆発、貧困、死を否定しないし、より一般的には「世界の実在」も否定しない。しかし同時に、社会的構成主義は、それらの実在を肯定もしない。・・・社会的構成主義は、「それは実在するのか」という問いに対して沈黙する。・・・「内界」に対する「外界」の基本的記述など存在しないし、経験や物質の基本的記述も存在しない。しかしながら、「そこに何があるか」を明示化しようとした途端、われわれは言説の世界に入り込むことになる。まさにその瞬間から、社会的構成主義のプロセスが始動し、明示化の試みは、社会的構成のプロセスおよび歴史・文化の中に、分かち難く織り込まれること



になる。そして、こうしたプロセスが始動すると、言語が実体化される。」(ガーゲン 2004 p.94)

この様な解釈は、言い換えると、実在論における「実在は人間の存在や信念から独立である」や「知識は実在によって決定される」という単純な信念も、反実在論の「経験的証拠による決定不全性」(デュルケム=クワイン・テーゼ)に従うことで世界は科学者集団その他の知的・政治的・経済的な「利害関心」の社会的要因や、行為者間の交渉や説得、妥協という社会的プロセスによって因果的に「決定される」という(極端な)社会的構成主義にも同意しない(平川 1998 p.106)と言える。

## 2-3 社会的構成主義と活動理論

活動理論 (activity theory) は、正確には、文化—歴史的活動理論 (cultural-historical activity theory) といい、その発展には3つの理論的世代が区別できる。第一世代は、ロシアのヴィゴツキーを中心とするもので、媒介 (mediation) のアイデアを生み出した。このアイデアは、ヴィゴツキーの有名は三角形のモデル、「複合的な、媒介された行為 (mediated activity)」に具現化されている。それは一般に、主体 (subject)、対象 (object)、そしてそれらを媒介するアーティファクト (mediating artifact) からなる三つ組で表われる (Engeström 1987, 訳 p.2)。人間をその文化的手段 (文化的アーティファクト) から切り離されて理解されることはありえないと言う前提に立っている。ヴィゴツキーは、人間の認知活動は文化に共有された記号 (とくに言語) や道具を媒介にしてはじめて意識的かつ能動的な行為を生み出すのだとし、認知活動 (記憶、思考、プランニングなど) はすべて社会・文化的な「状況に埋め込まれた活動 (situated activity)」であるとす (廣松他編 p.1245)。しかし、第一世代は、分析単位がもっぱら個人に焦点化されていたという限界があった。この限界は、レオンチェフ (Leont'ev 1981) の仕事に強く触発された第二世代によって克服され、個人という主体と共同体との複合的な相互関係に焦点が合わせられ、パラダイム上の重要な一歩が踏み出された。しかし、コール (Cole 1988) は、活動理論の第二世代が、文化的多様性に対して注意を払わなかったことを指摘し、活動理論の第三世代への扉を開いた。活動理論の第三世代に必要なことは、対話、多様なものの見方の枠組みや声、そして相互作用する活動システムのネットワークを理解できる概念ツールを開発することである (Engeström 1987 訳 p.3-4)。このモデルは、主体 (個人) と共同体と対象を結ぶ三角形において、主体と対象 (道具による媒介)、主体と共同体 (ルールが媒介)、共同体と対象 (分業が媒介) それぞれの相互関連によって人間活動を描く (Engeström 1987 訳 p.79)。エンゲストロームは、人間活動についての実りある基礎モデルを探求するために、4つの制約条件を設定した。①活動は、本質的な統一性と質を保証する最小単位で記述しなければならない。②活動は、進化的・歴史的变化において分析されなければならない。③活動は、文脈的あるいは生態学的な現象として分析されなければ

ならない。④活動は、文化的に媒介された活動として分析されなければならない。エンゲストロームは、この4つの要件をみたく人間活動の理論に必要な3つの研究的伝統を上げている。①パスに始まり、オグデンとリチャーズによって拡大され、ポパーの進化論的認識にいたる、記号・意味・知識についての理論化。②G・H・ミードによって基礎付けられ、幼児のコミュニケーションや言語発達の研究のなかで受け継がれている、間主観性の発生についての研究。③ヴィゴツキーに始まり、レオンチェフにおいて成熟した、文化—歴史学派の心理学。これらの理論すべてにおいて、媒介の概念、つまり第三項あるいは三角構造の概念が、人間活動の構成的特長とみなされている (Engeström 1987 訳 p.24-26)。また、エンゲストロームは、活動システムが生み出す動揺、革新、変化などの内的矛盾・コンフリクトに注目し、個人の行為と共同体との間の衝突・矛盾が不可避であるとした。しかしながら、それらのコンフリクトは同時に人間活動におけるダイナミクスと発展の源泉とも捉えていた。エンゲストロームは、内的矛盾との対峙によって生じる新たな活動への胎動となる学習を「拡張による学習」と呼んだ (青木 2005 p.194)。エンゲストロームは、マルクスの商品論に準拠して、商品の持つ二重性としての交換価値と使用価値から生じる矛盾が、活動の三角構造のすべての頂点に現れる、と指摘した (Engeström 1987, 訳 pp.84-96)。エンゲストロームのコンフリクトを「拡張による学習」と捉える視点は、城川 (2005) の電子会議システムによる集団意思決定をコンフリクト解決の視点から分析した論文にも見られる。

次の展開のために、ヴィゴツキーの最近接発達領域 (zone of proximal development) について述べる必要がある。最近接発達領域についてのヴィゴツキーの有名な定義は、「最近接発達領域とは、独力による問題解決によって決定される現実の発達水準と、教師の指導の下で、あるいは自分より有能な仲間との協同による問題解決を通じて決定される潜在的な発達水準との間の[範囲]のことである」というものである—ここでは、原文の「距離」を最近接発達領域の「領域」の語を強調して「範囲」とした— (Engeström 1987 訳 p.204)。ヴィゴツキーは、この考え方で、知的な能力は他人との関わり (相互作用) のなかから発達するということを主張した。エンゲストロームは、ヴィゴツキーの最近接発達領域を通していく道程でとられるべきステップで、特に欲求状態のダブルバインド (矛盾) への転換の分析を、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』の事例で示している (Engeström 1987 訳 pp.213-240)。

次に、拡張的学習や思考の道具としてのモデルについて考察する。近年の認知心理学の研究において、いわゆるメンタルモデルが注目されている。ラウズとモリス (Rouse & Morris, 1985 p.7) は、メンタルモデルとは、「人間がそれを使ってシステムの目的や形式を叙述することを可能にし、システムの機能や観察されたシステムの状態を説明することを可能にし、将来的なシステムの状態を予測することを可能にするメカニズムである」と定義している (Engeström 1987 訳 p.242)。

また、最近10年余りの間の新制度主義 (new institutionalism) の研究プロジェクトで注目されているデンザウ＝ノース (Denzau & North 1994) が主張するメンタルモデルとは、個人の認知システムが環境を解釈するために作り上げた内的表現を意味している。メンタルモデルは、スキーマ、フレーム、世界観、パースペクティブ、観念や視点などを含み、個人が世界を感知し定義することを助ける機能を果たす。かれらは、特に、主体間でメンタルモデルが共有されること、すなわち、「共有されたメンタルモデル (shared mental model)」の重要性を指摘している (磯谷 2004 p.50)。しかし、彼らのメンタルモデルのその道具としての機能は、個人の頭の中に静的に存在していて、外的・物質的・文化的にモデルを構成したり使用したりできない。また、彼らのメンタルモデルは、歴史的な基盤を欠いている。そこで、拡張的学習・思考においては、メンタルモデルは、機能的観点と歴史的観点から再構成する必要がある。機能的観点から、モデル構成と適用には3つの一般的ステップがある。第1のステップは、対象の構成から始まる。研究対象は、利用可能なその問題領域に関する先行知識の利用により主体によって構成される。このモデル構成は、アナロジーによって可能になる。理論構成における第2のステップは、抽象を意識的に外化し対象化する段階である。このステップでモデルが主体によって構成される。第3ステップは、主体はモデルを基礎として、またその助けをかりて理論を構築する。理論を具体化する際に、陳述や類型、ルールや手続きといった形式をとる。歴史的観点からの分析は、以上の機能的分析がより具体的に特徴付けられるために必要である (Engeström 1987 訳 pp.242-250)。そこで、エンゲストロームは、モデルに加えて第2の道具 (第1の道具は、身振りと技術的ツールのことである) の体系化にあたって、メンデレーエフの周期律の発見と、核分裂の発見からマンハッタン計画に至る歴史的事例を分析することによって、合計3つのタイプの道具を確認している。それらは、スプリングボード、一般的モデル、そして社会的モデルないしミクロコスモスである。スプリングボードとは、「促進的 (facilitative) イメージ、技術、ないし社会的・会話的布置 (あるいはそれらのコンビネーション) であり、以前の文脈における鋭い葛藤、ないしダブルバインド的な特徴から、新しい拡張的な移行的活動の文脈に誤って置かれたもの、あるいは移植されたものである。スプリングボードは典型的には、ダブルバインドの解決における一時的な状況的機能しかもたない。」 (Engeström 1987 訳 pp.285-286) しかし、実際問題として、スプリングボードはどのように見出されるのか? ここでは、その目的のために、エンゲストロームが取り上げているアルトシュラー (Altschuller 1984) の「S-フィールド分析」について述べる。S-フィールド分析は、発明にかかわる問題の対象が環境や他の対象との交互交渉をおこなうことにより問題を解決する際に、この2つの実体 (対象と環境) とひとつの場 (これが S (substance)-フィールド (field) と名づけられ、最小の技術的なシステムの形成にとっては必要十分なものである) を特定する方法である。その際、葛藤状態にあるペアの間にアーティファクト (道具) を介入させなけ

れば、問題についてのモデルは崩壊する。しかし、そのアーティファクトが具体的に何かについては、明確な記述がない (Engeström 1987 訳 pp.341-342)。次に、一般的モデルについて述べる。メンデレーエフにとっての新しい一般的モデルは、書かれた理論の形式をとり、周期律表という図式的な形式に具体化された。核分裂とマンハッタン計画の事例では、一般的モデルは、書かれた理論と数式の形式で表現された。次に、ミクロコスモスとは、新しい形式の活動の前に準備的に出現する共同体のミニチュアである。ミクロコスモスは、社会的・組織的な一般化のステップがとられるべき機が熟した後には捨てられるべき乗り物である (Engeström 1987 訳 pp. 285-297)。ミクロコスモスの形成の過程では、間主観性の発達の性質が重要である。フィヒナー (Fichtner, 1984) は、間主観性には発達的に連続する3つの基本的な形式があることを示唆した。①最も未発達な形態としての協応 (coordination) 形式。個々人は共通の対象に働きかけるために集められるが、それぞれの個人は各自独立に課題の解決に努力するが、相互交渉はない。②中間的な形態としての協働 (cooperation) 形式。ここでは、与えられた課題を協働して解決していこうという意識的で目標志向的な相互作用が持続的に存在する。③第3の形式は、反省的なコミュニケーション (reflective communication) である。反省的なコミュニケーションとは、相互作用の中で集合的な反省作用として、あるいは集合的な主観性として、自らの役割を自覚的に確認していく過程であるといえる。

エンゲストロームは、第3の道具として、弁証法を上げている。拡張的思考・学習 (これは、集団的で拡張的に習得された活動の歴史的に現れつつあるタイプと密接に結びついている) は、抽象から具体へと上向する手続きである弁証法を道具として必要とする (Engeström 1987 訳 p.324)。エンゲストロームは、ヘーゲルによる弁証法に準拠しつつ、弁証法の本質を次のように述べている。「ヘーゲルは、個人意識の論理形式を正しく見ていた。それは、個人のこころの外側にあるモノによって、個人を取り巻き、揺りかご以来、相互作用してきた人々によって集団的に創造され伝達されてきた精神的・物質的文化全体によって、客観的に決定される。・・・ヘーゲルにとって弁証法は、まさに思考の形式であり方法であった。それは、矛盾を解明すること、そして対象のより深いレベルにおける理解にもとづいて、矛盾を具体的に解決することを共に含む過程だった。・・・弁証法的思考の実践的成果は、個人的に調整されるのではなく、集団的で文化—歴史的で社会的な発展であり、物質的な人間文化の質的变化である。」 (Engeström 1987 訳 pp.309-310) ここで、エンゲストロームは、ヘーゲルの弁証法が形式論理を超えている点を強調している。エンゲストロームは、バフチンによる異種混合あるいは交響するポリフォニーを第3の道具と結びつく社会性の特殊の形式として位置づけている (Engeström 1987 訳 p.324)。バフチンは、小説を叙事詩と比較する。バフチンは、叙事詩的世界は、完全に出来合いの世界観であり、「小説は、芸術的に組織された社会的ことば (speech) のタイプの多様性 (ある場合には言語の多

様性), および個々の声の多様性として定義できる。・・・小説はすべてのテーマを交響させる。・・・作者のことは、語り手たちのことは、挿入されたジャンル、登場人物たちのことは、これらはすべて異種混交 (heteroglossia) を小説に導入するための基本的な構成単位にすぎない。」(Bakhtin, 1981, pp.262-263) とその両者の違いを述べている。エンゲストロームは、上のバフチンの分析を受けて、文学的意識の支配的形式としての叙事詩と、学習の支配的形式としての徒弟制とのあいだの類似性を指摘している。エンゲストロームは、徒弟制の「世界」は、叙事詩の「運命」や「筋書き」と呼応し、産業資本主義と義務教育が徒弟制にとってかわったように、小説が叙事詩にとって代わったと、分析している (Engeström 1987 訳 p.320)。バフチンの分析を拡張的学習と拡張的研究に適用して、エンゲストロームは、「活動システムにおいてはさまざまなグループや階層の声が衝突し補完し合っている。こうした声のすべてが含みこまれ役立てられねばならない。」(Engeström 1987 訳 p.323) とした。

## 2-4 社会的構成主義としてのアクターネットワーク理論とゴミ箱モデル

ミシェル・カロンのアクターネットワーク論 (actor-network theory) について次に見てみよう。カロンはイノベーション社会学センターの所長を長く勤め、早くから技術革新をひとつの社会現象として捉え、実験室が否定できない社会諸力の源泉であるのはなぜか、その理由を追求してきた (金森 2000 p.180)。カロンの『科学と技術の力動性を写し取る』所蔵の「アクターネットワークの社会学、電気自動車の場合」(Callon 1986 pp.19-34) という論文で、実験室内での科学の生成における社会的文脈と自然的文脈を結びつけるその手法として、アクターワールド、アクターネットワーク、翻訳の3つの概念を提示した。アクターワールド (actor-worlds) は、この電気自動車 (VEL) の開発という文脈では、①開発計画の元締めであるフランス電力公社 (EDF)、②新型の鉛蓄電池などの開発をする電機メーカー、③シャシーを担当するルノー、④電気自動車に有利な規制を整える市町村に助成を出す関係省庁、⑤蓄電池、燃料電池、電極、触媒、電解質、電子、などの人間を含むデバイスなどすべての「参加者」(アクター) から成り、その中でも特に重要なアクターは EDF である。なぜなら EDFこそが、VEL というプロジェクト全体を起動させ、周囲を巻き込み、運動を継続させるのに重要な役割を持っているからである。アクターワールドが静態的な側面を記述するとすれば、アクターネットワークは、より動的で暫定的な側面を記述する概念である。つまり、一つのアクターは、一つのアクターワールドにも、他の多くのアクターワールドにも属しているが、特定のアクターワールドに特定の役割でコミットしている。例えば、電機メーカーは何も鉛蓄電池のみを作っているわけではなく、ルノーも VEL 用のシャシーだけを作っているわけではない。また、電気自動車の開発のアクターワールドには、いつ新規参加者が入ってきて、アクターワールドの構造を変えてしまうかもしれない。その様に、特定のアク

ターは、特定のアクターワールドでは、ある部分を、別のアクターワールドでは、それとは別の側面を表すというような事態を表現するのにカロンは、アクターネットワークとう概念を作った。翻訳 (translation) とは、アクターの役割を定義し、その役割を分配し、シナリオを書くことを意味する。電気自動車の開発での重要な翻訳者は、EDF である。EDF はルノーを翻訳し、燃料電池や消費者を翻訳する。例えば、ルノーは普通車のメーカーだったが、EDF の翻訳によって VEL の車体を作る会社になった。翻訳者はアクター群の欲望、秘密の思考、利益関心、操作メカニズムなどを語り、しかもそれらの名の下に語る。翻訳の仕方は、単なる交渉から誘惑、純粋な暴力に至るまで幅広いスペクトルを持つ。だが科学技術が問題の場合、最も一般的に使われる戦略は問題化 (problematisation) である。例えば、EDF は、ユーザーに対して、もし環境汚染を避けなければ、VEL を作るべきであると言い、そのためには、電気化学的力源が短命であるという問題が解決されなければならないと言い、その解決のための研究所を見つけなければならない等々と言う。その様に、一度問題が設定されると、問題が解決されるまで通過しなければならない道筋が示される。その意味で翻訳は義務的通過点を定義する。ここで重要なことは、アクターネットワークには、中心がないということである。EDF のような翻訳センターでさえ、暫定的である。また、アクターが人間であるか物や組織であるかは重要でない。実験室がある成果を出すことができるなら、そこで働く研究員だけでなく、そこにある装置や器具などの物にも知性があると考ええる (金森 2000 pp.180-186)。この様なアクターとしての物にも知性があるという考え方は、ギブソンの「アフォーダンス」と同じものである (佐々木 1996)。

以上のアクターネットワークによる社会的構成主義のアプローチに非常に近いアプローチとして、マーチ=オルセン、あるいはコーエン=マーチ=オールセンらとそのグループによってなされた組織における意思決定に関するゴミ箱モデルの一連の研究 (March & Olsen 1979 ; Cohen, March & Olsen 1972) がある。以下田中 (2004 p.76-82) に沿ってゴミ箱モデルを見て行く。コーエン=マーチ=オールセンらは、現実の変転きわまりない集団意思決定状況を記述するのに「4つの流れ」(これらが、アクターネットワークにおけるアクターに対応する) に注目した。それら4つの流れは、①問題、②解、③参加者、④機会選択の4つである。①問題 (problem) とは、組織内外の人々の関心事である。これらは大きいものから小さいものまで種種雑多なものがある。例えば、世帯交代、家族関係、組織内の派閥、地位や仕事をめぐる競争と軋轢、仕事の配分、あるいはイデオロギーなどの問題である。②解とは、かならずしも特定の問題に対応して生み出されたものとはかぎらない。解が分かって初めて、解くべき問題が何であるかが分かる時もある。例えば、新製品を販売してから、その商品の購買層のニーズがわかることもある。またそれと類似した別の例として、「今日では一般に電話は、遠距離にある複数 (多くは2人) の人間の間でのリアルタイムの対話を可能にするパーソナル・コミュニケーション・メディアであるが、19世紀

後半から 20 世紀前半には、今日のラジオのように音楽演奏やニュースを遠距離に送信・再生するメディアとしての可能性も試みられ、ブタペストの「テレフォン・ヒルモンド」のように実際に企業化されてもいる。革命後のソ連では、電話による優先情報サービスは無線と違って情報が拡散せず統制も容易なことから、40 年間にわたりラジオ放送を上回るマスメディアとして機能した。・・・電話は、先行メディアとしての電信をモデルとして、電話番号による交換システムと回線網によるネットワーク化という社会的なインフラ整備や、後発メディアであるラジオとの棲み分けを通じて、当初の多様な可能性の中の特定のものが選択された結果現れてきたのである。」(北川他 2002 p.658) ③参加者 (participant) とは、いつも特定されてはおらず、常に出入りがあるものと認識されている。参加者の実質的な変化は、単に当該の選択の特定によっては決まらず、むしろ、それは参加者が限られた時間をどう他の機会との間で、配分するかに依存する。④選択機会 (choice opportunity) とは、一般に選択と呼ばれる行動を生み出すと期待される場 (occasion) のことである。具体的には、契約が締結されたり、雇用がなされたり、支出がなされたり、あるいは責任が配分されたり、また変化に対する措置が講ぜられたりといったことの期待される場が、選択機会と呼ばれるものである。組織には通常、こうした場を通知する何らかの方法が存在する。要するに、彼らによれば、「問題」は自ら表明される場、自己を解決してくれる解のありそうな選択機会を探している。「解」は自己にふさわしい問題、自己を適切に処理してくれそうな問題を追い求めている。「参加者」は自己の表出が十分に可能な場、あるいは関心のある領域にそのエネルギーと時間とを投入する。そしてこのような問題、解、参加者の出会う場、それが「選択機会」だというのである。このモデルを比喩的に彼らは、「ゴミ箱モデル」と言っている (Cohen, March & Olsen 1972)。

この様な考え方は、社会的構成主義の流れから出てきた「実践としての科学」(Pickering 1992) において、結果的に出来上がった科学ではなく、探索途上にあり、多くの敵対相手と同盟相手—それらには人間的なものだけでなく対象や装置など非人間的・物質的なものも含まれる—に囲まれつつ進行するプロセスの中に身を置くという方法論的態度にも通じる。この立場は、科学的実践を認知的なもの和社会的なものの相互作用系と捉え、知識の決定に関して、決定要因については「多元決定性」の観点を固辞し、時間要因については「事前的な過小決定性」と「事後的な過剰決定性」を区別し、前者にみずからを位置づけることである。ここで、「多元的決定性」とは、科学知識や技術的成果を、認知的／社会的／文献的／装置的／物質的／時間的なそれぞれの次元の全体的相互作用系として捉えることである。「事前的な過小決定性」と「事後的な過剰決定性」に関しては、ラトゥールによる科学上の論争の「決着前」と「決着後」という事前／事後の時間的様相の区別と両者の相補性の指摘がある。科学者が自らの仕事の遂行中は、事前的には決定的決め手に欠け (事前的な過小決定性)、論争相手に対しても自らに対しても相対主義的にならざる



をえない。一方、科学者間で合意に達するのに時間はかかるが、結局は自然が決着をつけてくれる（事後的な過剰決定性）。（平川 1998 p.105）

### 3. 集団意思決定における社会的構成主義

Austin (1962) は、その発話行為 (speech action) の一般理論において、言語は単なる記述ではなく、常に行為に内容 (component) をもたらすと結論づけている。従って、集団意思決定がうまく機能することによって組織運営が効率的に遂行される。話すことと行為を分離して考えることはできない。集団意思決定では、話すこと、つまりディスコースと行為が不可分の関係にある。しかし、集団意思決定においては、利害関係から多くの相反するディスコースが共存しており、単一の合意に達することが困難である。つまり、ある合意に達したディスコース（共通意味世界 (a common meaning world) の創造）は、他のものにとってパワー／知識ディスコースの制約の中から再帰的に構成されたといえる。流動性の高い現代社会経済システムにおいては、多義的・パラドックス的な分析の必要性が高まっている。つまり、従来のような一貫性、秩序、規則性、確実性といった標準的ディスコースは、脱構築され、非線形的・柔軟性をもったポストモダニズム的なディスコースに取って代わられる。

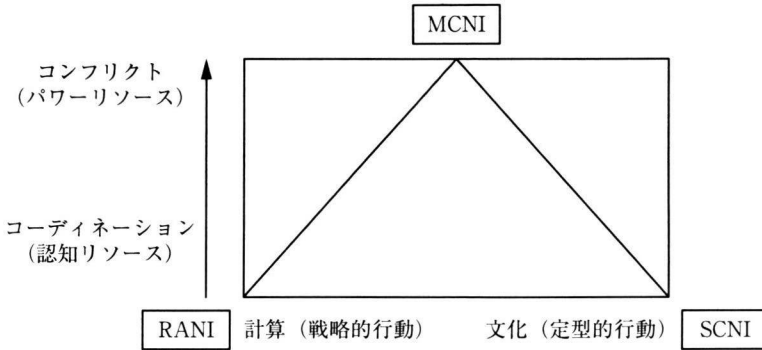
この節は、集団意思決定を社会的構成主義の観点から理解しようとする試みである。上で見たように、集団意思決定は、共通意味世界の創造を志向したディスコースの一形態であり、さらなる他のディスコースを誘発する基礎ともなる。このようなある課題に関するディスコースの集積を通じて、利害関係にある集団間のコンフリクト解決を可能にする共通認識枠組み (frame) が生成されていく過程—共通意味世界の創造過程—が、社会的構成主義の観点から考察される。社会的構成主義とは、利益やアイデンティティの形成における社会的相互作用が強調され、討議過程における理念、価値、規範等に関するディスコースの役割に光が当てられる。その様に、社会的構成主義は、共通意味世界の構築過程が、無数の相反するディスコースのせめぎ合いの中から立ち上がってくる過程を重視する。2.3 社会的構成主義と活動理論で言及した新制度主義における研究プロジェクトをディマジオは、3つのヴァリエントに分類した。

ディマジオ (DiMaggio 1998) によれば、合理的行動新制度主義 (RANI) は経済学から始まり、社会的構成主義新制度主義 (SCNI) は社会学に起源をもち、さらにコンフリクト仲介新制度主義 (MCNI) は政治学に密接な関係をもつものとされる。合理的行動新制度主義 (RANI) は、制約（あるいはルール）としての制度の概念化に、社会的構成主義新制度主義 (SCNI) は、文化的・認知的枠組みとしての制度の概念化に対応している。また、コンフリクト仲介新制度主義 (MCNI) は、国家やその他の制度が異なる利害を持つ集団間のコンフリクトをどのように構造化し、仲介



するのかという点で注目される（磯谷 2004 pp.50-51）。

図1 3つの新制度主義：コンフリクトvs.コーディネーション／計算vs.文化



(出所：Nielsen 2001 p.507の図1， 磯谷 2004 p.51の図2-1)

さらに、ニールセン（Nielsen 2001）は、新制度主義の3つのヴァリエーションの間の差異のみならず、その関係を図1のように表した。図1の水平軸は「計算 vs.文化」軸であり、合理的行動新制度主義（RANI）は、計算を強調し、経済主体の行動は、制度が各経済主体に課す制約の範囲内で行われる戦略的なものとみなされる。これに対して、社会的構成主義新制度主義（SCNI）は、人々の行動をルーチン化されたものとみなし、経済主体の意思決定状況の解釈において、個人の認知的枠組みが果たす役割を強調する。コンフリクト仲介新制度主義（MCNI）は、これら2つの中間に位置し、個人と集団を、利己的で自己の利害に基づいて行動する経済主体とみなすが、そうした利害は制度によって構成されもすると考える。図1の垂直軸は、「コンフリクト vs. コーディネーション」軸であり、合理的行動新制度主義（RANI）と社会的構成主義新制度主義（SCNI）はともに、経済行動のコーディネーション問題に関する制度の役割を強調する。しかし、両者は個人の認知レパートリー概念において異なっている。合理的行動新制度主義（RANI）における個人にとっては、制度の存在とその内容を知っていることが暗黙の前提になっているのに対して、社会的構成主義新制度主義（SCNI）の個人にとって、制度の存在やその内容を知っていることは必ずしも不可欠ではない。これに対して、コンフリクト仲介新制度主義（MCNI）は、制度化と制度変化の源泉として、コーディネーション問題よりも利害の対立を強調する。そして、制度の創発と変化の説明においても、個人と集団の認知リソースよりもパワーリソースが重視される（磯谷 2004 p.51-52）。また、代表的な新制度主義的研究を生み出してきたアームストロング（Armstrong 1995 p.167）は、その目的を次のように要約した。

「制度主義研究者（institutional writers）の中心的な関心は、・・・意思決定過程が形作られ

る際の諸制度の役割を理解することにある。ここでは、「諸制度」とは、機関行為主体 (institutional actors) 間の相互行為を形成し、自らに割り当てられた諸機能へと機関行為主体を方向づけていくような、ルール、規範、信念、レトリック、イデオロギー、手続きとして定義することができる。」

新制度主義の主な狙いは、ある何らかの集団意思決定の合意（共通意味世界の創造）をもたらすアクターの戦略的な行為や選好の形成に対して、制度がいかにインパクトを与えるかを認識することである。一方、社会的構成主義は、それとは狙いが異なり、集団意思決定の合意（共通意味世界の創造）に至るまでの過程の動的な示唆を与えるものである。

岡本・足立・石川（2006 pp.119-170）らによる、新制度主義からの集団意思決定の分析は、集団意思決定の代表である会議に焦点を絞って、会議の結果を左右する制度的要因および会議参加者の心理的要因を特定すべく、シミュレーション分析を行っている。その結果、会議の結果に影響を与える制度的要因は、①決定ルール、②集団サイズであり、心理的要因は、発話態度が特定された。①決定ルールは、全員一致ルールか過半数ルールなど表決で最終判断を下す際の規則であり、案件の採択率に対して、話し合いのプロセスよりも直接的な影響をあたえる。②集団サイズに関しては、集団サイズが大きくなると、集団で結論を出す際に、個々人が最初に抱いていた意見よりも極端になるという、所謂、極化現象 (Storner 1968) が見られる。また、発話態度に関しては、他の人が自分と同じ意見を表明したら、すぐにそれと同じ意見表明をする者（追従者）、成り行きを見ながら意見表明するかしないかを決める者（日和見主義者）の多寡が、案件の採択率に影響を与える。

一方、社会的構成主義の観点からは、活動理論においてエンゲストロームが上げた第3の道具である弁証法が、集団意思決定のケースでも有用な道具になる。そこで次に、弁証法をその1種として含む、集団意思決定における構造的コンフリクト（構造的議論、あるいは対話での対決）解消のための技法（道具）として天の邪鬼法の研究を概観する。

全ての組織には対立する見方が存在する。これらは異なる政治的利害によっている。奇異に聞こえるかもしれないが、異なった政治的利害者集団、あるいは戦略的問題状況についての異なるパースペクティブを持つ集団の代表者が構造的コンフリクトを起こした時、意思決定は多くの方法で改善される。構造的コンフリクトの活用を通じて、認知的過程は改善され、情報のより一層の把握や意思決定の理解がもたらさせると同時に、対立する証拠に直面して、自らの見方への疑問が呈される。対人過程や認知過程は改善され、より一層の情報交換が行われるようになる。政治的要因は改善され、他の見方のより一層の理解と他者情報の最終決定への一体化がもたらされる (Johnson and Tjosvold 1983; Mason and Mitroff 1981; Tjosvold 1985)。この様な多くの利点を持つ構造的コンフリクトを意識的に起こす役割を担う個人や集団をここでは「天の邪鬼」という。

次に、天の邪鬼の方法による構造的コンフリクトの活用を述べる。構造的コンフリクトのための必要条件の1つは、組織メンバー間の意見あるいは見方の相違である。意思決定者間の意見の一致と組織業績との関係に関するブルデュの研究がある (Bourgeois 1985 p.564)。この研究では、20の企業における99人のトップ経営者の環境不確実性と目標一致についての情報を収集した。知覚された環境不確実性についての一致と目標の一致している場合は、低い財務業績しかえられない。また、見方の多様性と企業内の環境不確実性の知覚の正確さとは、正の相関がある。この結果は、ブルデュ (Bourgeois 1980) による以前の研究の拡張になっている。その研究では、12人のCEOとのインタビューおよび67人のトップ経営者による質問票への回答からのデータを使って、目標についての不一致や手段についての一致は、高い業績と結びついているのに対して、目標についての一致と手段についての不一致が、最悪の業績を導くとした。全体として、諸研究は多様性と不一致が環境知覚や意思決定の質を改善することを示唆している (シェンク 1998 p.84)。

天の邪鬼 (DA: Devil's Advocacy) の役割に関しては、早まった一致が、仮定への挑戦や考慮される代替案の範囲を制限することになるので、それを回避するために意思決定過程に批判を導入することである (シェンク 1998 p.85)。つまり、天の邪鬼法は、意思決定を改善するためにコンフリクトを導入することである。次に、天の邪鬼法のいくつかのバリエーションを紹介する (シェンク 1998 pp.86-93)。

#### (1) 単純な天の邪鬼法

ジャニス (Janis 1972) やジャニスとマン (Janis and Mann 1977) は、単純な天の邪鬼法の成功例としてキューバミサイル危機におけるロバート・ケネディーの役割を上げた。最高責任者は、天の邪鬼の役割を1つかそれ以上の集団に割り当てるべきであるとしている。天の邪鬼法は、提案された公式的言明とその基礎にある分析で始められるべきである。そして、一貫性のなさ、正確性の欠如、関連性の無い提案を吟味し、その吟味にもとづく提案の批判を準備するべきである。提案が根拠薄弱であると思われるならば、天の邪鬼は問題の再分析や代替的案勧告を開発すべきである。始めの提案の主張者と天の邪鬼との間の一種の対決セッションが、オブザーバーとして重要な組織決定者も参加して行われる。この対決セッションに支えられて、組織の意思決定者は提案を受け入れるか、それを修正するか、始めの提案の欠点のより完全な理解に基づく全く新しい提案を開発するかを行う。組織メンバーか外部コンサルタントのどちらかが、天の邪鬼の役割を演じる。組織メンバーが使われるならば、ハーバートとエステス (Herbert and Estes 1977 p.666) は、上位経営者になる可能性を持つ若い経営者間で、ローテーションするべきであると示唆している。

天の邪鬼法 (異議を唱えること) が“飼いならされる” (Thompson 1968) と、その結果、批判

は割り引いて聞かれ、その有効性を失うことになるので注意が必要である。

## (2) 複数の主張 (multiple advocacy)

ジョージ (George 1972) は、複数の主張が天の邪鬼の方法よりも優れていると述べている。複数の主張システムでは、様々な少数意見や有力でない見方の代表者によって、有力な政策の仮定を疑うことが奨励され、意思決定者にそうした意見や見方が提出される。単純な天の邪鬼法は、典型的には有力な政策の唯一の批判を含んでいる。複数の主張システムの過程において中心となる役割は有力でない見方の管理人 (custodian) の役割である (George 1972 p.759)。管理人は次のことを保証しようと試みる。

- ① 様々な見方の主張者間に重要な資源の不均衡配分がないこと (重要な資源にはパワー、影響力、能力、情報、分析的資源、交渉・説得技法が含まれる)
- ② 議論においてトップレベルの意思決定者の介入がないこと。
- ③ 意見交換に十分な時間があること。

## (3) 弁証法的探索 (DI: Dialectical Inquiry)

メイソンとミトロフ (Mason and Mitroff 1981) は、単純な天の邪鬼法を改善するための代替的技法を開発した。この技法は、弁証法的探索とよばれ、その精緻化された形態である戦略仮定分析 (SAA: Strategic Assumptions Analysis) が、エムシュフとフィンネル (Emshoff and Finnel 1978 p.11) によって開発された。まず、弁証法的探索法では、戦略問題に対して最も異なる解を生み出す集団を形成すべく、個人を選択するための技法を含んでいる。これらの技法はまず第1に、意思決定集団におけるそれぞれの人々のパーソナリティーや問題解決志向の評価を含んでいる。意思決定者を最大限に同質であり、互いに異なる集団にクラスター化する。これらの集団は、推薦された戦略、あるいは計画に対する代替案をそれが基礎をおく集団のメンバーが同意していない仮定を識別することによって開発する。その際、それらの集団は、異なる仮定に基礎をおく明白な対案を開発する。一方、天の邪鬼法は、明白な対案の開発を義務づけていない。それらに対して、戦略仮定分析は、仮定についての弁証法的議論に付け加えて、仮定交渉フェーズを含む。このフェーズは、意思決定者を集団に分割し、その集団が組織のデータベースの異なる解釈に基づく2つかそれ以上の対案を生み出した後に続く。仮定交渉フェーズでは、各々の集団メンバーは、他のグループから、“その集団の政策を最も動揺させる仮定、その集団にとって上手くやっていくことが難しい仮定”を識別し、疑うことを要求される。共通の仮定集合に到達すべく、諸仮定は議論され、交渉される。このようにして、戦略仮定分析は、対案と批判の両方を含む。

以上3つのタイプの天の邪鬼法を紹介したが、多くのフィールド実験においては、総じて、弁

証法的探索が経営者の助言の狭量的効果を減らし、新しい代替案の生成に導き、そして決定への満足を増加させた。しかし、これらの結論は、試論的である。なぜなら、フィールド・スタディが弁証法的探索の効果について経営者の判断に依存しているからであり、統制条件を含んでいないからである（シエンク 1998 p.96）。

次に、天の邪鬼法へのコミットメントの必要性について述べる。

天の邪鬼法が有効になるための条件は、以下のものである。①意思決定者の曖昧さ許容度（環境からの曖昧な情報を取り扱う能力）が高いこと（Schwenk 1982）。②意思決定者の過去の経験を有効に生かすことが必要である。ピックス湾侵攻の失敗によって、ケネディー大統領は、以後彼の意思決定能力に対してより謙虚になり、天の邪鬼の言明を真剣に受け入れるようになった。一方、ヴェトナム戦争におけるエスカレーション決定において、ジョンソン大統領は天の邪鬼の示唆することを真剣に考慮することを促進するような類似の失敗経験を持っていなかった。③組織構造あるいは文化は、天の邪鬼法が有用になるかどうかの確率に影響を与える。つまり、単一の支配的見方があり、その見方が外部の脅威に対して防衛的な組織においては、意思決定者は天の邪鬼が示唆するような仮定を疑うことが難しい。しかし、ジャニス（Janis 1972）やジェニスとマン（Janis and Mann 1977）は、意思決定集団が知覚された環境の脅威に折り合うとき展開する集団思考を防ぐために、天の邪鬼や他の技法を必要とすることを指摘している。④時間の圧迫は、天の邪鬼の助言がいかん真剣に受け入れられるかを決定する要因である。つまり、天の邪鬼が意見を取り扱うことは時間がかかり、天の邪鬼は、たとえ天の邪鬼を必要とする状況であっても、最終期限に直面した意思決定者によって無視される危険がある（George 1972 p.759）。

次に、集団意思決定の質を改善する道具的介入として、個々人のコミュニケーション・パターンの改変を試みたり、ディスカッション技術を向上させることの重要性について述べる。ヘルメリッヒたちは、飛行機のコックピットにおけるパイロットのコミュニケーションに関する一連の研究（CRM; Crew Resource Management）で、そこでのコミュニケーション・パターンが文化規範に少なからぬ影響を受けていることを明らかにし、意思決定プロセスにおけるコミュニケーション・パターンの重要性について論じている（Helmreich & Meritt 1998; Helmreich et al., 2001; Merritt & Helmreich 1996）。彼らが指摘するように、長幼の序のある文化規範では、地位や年齢の低い方が自己主張し、上から言われたことに対して質問する（異を唱える）ことを良しとしない。そうした文化規範が広く共有されているところで、コミュニケーションを「円滑に進める」ことが目的であれば、この規範に従うのが最良の方法と言えるだろう。しかし、それは危機的状況であれば致命的なものになりかねない。飛行機のコックピットでこの規範に従う限り、危機的状況にあることを認めようとしない機長に目下の副機長が繰り返し警告し注意を促し続けることは難しいからである。このような事態にならないためには、個人だけでなく、参加メンバーを対

象としたコミュニケーション・パターンを変えるための訓練や教育が必要であり、それが、集団コンフリクト解決のための有力な道具になる。

また、最近のITの発達により、会議を効率的かつ円滑に進めるためのGDSS（Group Decision Support System）（城川 2001）の活用や、ファシリテーター（facilitator）の活用も有効な道具になると期待されている（岡本他 2006 pp.145-146）。ファシリテーターとは、英語のfacilitate（促進する）から来た言葉で、「促進させる役割の人」という意味の言葉である。この言葉が使われる場面は、教育現場での集団学習、社会福祉分野、ソーシャルワークの現場、地域でのコミュニティー活動、ビジネス分野でのプロジェクトチームの運営や組織の活性化等がある。一般的に、ファシリテーション・スキルは、会議のための技法（道具）にとらえられることが多い。ファシリテーションの基本的なスキルとしては、①質問、発言、要約する、②話を聞く、話を引き出す、③記録する、④グループ調整をする、⑤コンセンサスを構築し、意思決定プロセスを管理する、等が上げられる（Rees 1998）。

ファシリテーターと弁証法的探索における天の邪鬼との違いは、ファシリテーターは、あくまで問題点を整理し、問題の本質を嗅ぎ分けて（ビジネスIQ）、人の感情に働きかけて考えさせる（ビジネスEQ）ことであり、天の邪鬼のような意思決定を改善するためにコンフリクトを導入したり、代替案を提示したりはしない。この使い分けは、ケースバイケースである。

#### 4. 今後の課題

ここでは、集団意思決定における社会的構成主義の視点の導入により、集団意思決定過程の動的な分析と集団意思決定の質的な改善のため介入手段を主に取り上げてきた。今後は、これらの分析および道具を、欧米とは異なる文化背景を持つ日本においても有効性をはっきりするように改良することが必要である。

#### [参考文献]

##### <邦語文献>

1. 青木克生（2005）「組織学習における実践ベース・アプローチ」、岩内亮一他、『ポストモダン組織論』、同文館出版、第8章。
2. 磯谷明德（2004）『制度経済学のフロンティア理論・応用・政策』、ミネルヴァ書房。
3. 白井陽一郎（2003）「EC環境立法の展開と共通意味世界の構成：社会構成主義の観点から」、新潟国際情報大学 情報文化学部紀要 第6号。
4. 岡本浩一、足立にれか、石川正純（2006）『会議の科学』、新曜社。

## 集団意思決定の社会的構成主義による考察

5. 金森 修 (2000) 『サイエンスウォーズ』, 東京大学出版局。
6. ガーゲン, K・J (2004) 『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』, 永田素彦・深尾誠訳, ナカニシヤ出版。
7. 城川俊一 (2001) 「電子会議システム (EMS) による集団意思決定のモデル化について—5種類のEMSのマルコフモデルの数値解析による比較—」, 経営情報学会誌, vol.10, No.1, pp.43-79.
8. 城川俊一 (2005) 「電子会議システムによる集団意思決定—コンフリクト解決を中心に—」, 東洋大学経済論集第31巻2号, pp.191-224.
9. 北川高嗣他 (2002) 『情報学事典』, 弘文堂。
10. 木村純子 (2001) 『構造主義の消費論』, 千倉書房。
11. 佐々木正人 (1996) 『アフォーダンス—新しい認知の理論』, 岩波書店。
12. シェンク, C.R. 山倉健嗣訳 (1998) 『戦略決定の本質』, 文眞堂。
13. 高橋正泰 (2005) 「ポストモダニズムと組織のディスコース」, 岩内亮一他 (2005) 『ポストモダン組織論』, 第4章, 同文館。
14. ダンジガー, K. (2005) 『心を名づけること—心理学の社会的構成—, 上・下』, けい草書房。
15. 平川秀幸 (1998) 「知識政治哲学序論」, 現代思想, 特集:サイエンス・ウォーズ, vol.26-13, 青土社。
16. 田中政光 (2004) 『イノベーションと組織選択』, 東洋経済新報社。
17. 廣松渉他編 (1998) 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店。

### <外国語文献>

1. Altshuller, G.S. (1984) *Creativity as an exact science: The theory of the solution of inventive problems*, New York: Gordon and Breach Science Publishers.
2. Armstrong, K.A. (1995) "Regulating the free movement of goods: institutions and institutional change," in J. Show and G. More (eds), *New Legal Dynamics of European Union*, Clarendon Press.
3. Austin, J. (1962) *How to Do Things with Works*. Oxford University Press.
4. Bakhtin, M. M. (1981) *The dialogic imagination*. Austin: University of Texas Press. (伊藤一郎訳『小説の言葉』, 平凡社ライブラリー 1996年; 川端香男里ほか訳『抒情詩と小説』, 新時代社, 1982年)。
5. Bourgeois, L. (1980) "Performance and consensus," *Strategic Management Journal*, 1, pp.227-248.
6. Bourgeois, L. (1985) "Strategic goals, perceived uncertainty, and economic performance in volatile environments," *Academy of Management Journal*, 28, pp.548-573.
7. Burr, V. (1995) *An Introduction to Social Constructionism*. Routledge. (田中一彦訳 (1997) 『社会的構成主義への招待—言説分析とは何か—』, 川島書店)。
8. Callon, M. (1986) "The Sociology of an Actor-Network: The Case of the Electric Vehicle", M. Callon, J. Law & A. Rip eds., *Mapping the Dynamics of Science and Technology, Sociology of Science in the Real World*, The MacMillan Press.

9. Cohen, M.D., J.G. March, and J.P. Olsen (1972) "A Garbage Can Model of Organizational Choice," *Administrative Science Quarterly*, Vol. 17, No. 1, March.
10. Cole, M. (1988) "Cross-cultural research in the sociohistorical tradition," *Human Development*, 31, pp.137-151.
11. Denzau, A.T. and North, D.C. (1994) "Shared Mental Models: Ideologies and Institutions," *Kyklos*, 47.
12. DiMaggio, P.J. (1998) "The New Institutionalism: Avenues of Collaboration," *Journal of Institutional and Theoretical Economics*, 154 (4).
13. Emshoff, J.R., and Finnel, A. (1978) "Defining corporate strategy: A case study using strategic assumptions analysis," Working paper no.8-78, Wharton Applied Research Center, Philadelphia, October.
14. Engeström, Y. (1987) *Learning by Expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*. Orienta-Konsultit. (山住勝広他訳『拡張による学習』, 新曜社, 1999年)。
15. Fichtner, B. (1984) "Co-ordination, co-operation and communication in the formation of theoretical concepts in instruction," In M. Hedegaard, P. Hakkarainen & Y. Engeström (Eds.), *Learning and teaching on a scientific basis* (pp.207-228). Arhus: Aarhus Universitet, Psykologisk institut.
16. Foucault, M. (1972) *The Archaeology of Knowledge*. Tavistock.
17. Foucault, M. (1976) *The History of Sexuality: An Introduction*. Penguin.
18. George, A. (1972) "The case of multiple advocacy in making foreign policy," *American Political Science Review*, 66, pp.751-785.
19. Helmreich, R.L., & Merritt, A.C. (1998) *Culture at Work in Aviation and Medicine: National, organizational, and professional influences*. Aldershot, U.K: Ashgate. pp.53-105.
20. Helmreich, R.L., Wilhelm, J.A., Klinect, J.R., & Merritt, A.C. (2001) "Culture, error and crew resource management." In E. Salas, C.A. Bowers, & E. Edens (Eds.), *Improving Teamwork in Organizations: Applications of resource management training*. (pp.305-331), Hillsdale, NJ: Erlbaum.
21. Herbert, T.T., and Estes, R.W. (1977) "Improving executive planning by formalizing dissent: The corporate devil's advocate," *Academy of Management Review*, 2, pp.662-667.
22. Hollway, W. (1984) Gender Difference and the Production of Subjectivity. In Henriques, J., W. Hollway, C. Urwin, C. Venn & V. Walkerdine (eds) *Changing the Subject: Psychology, Social Regulation and Subjectivity*. Methuen.
23. Janis, I.L. (1972) *Victims of Group Think*. Boston: Houghton Mifflin.
24. Janis, I.L., and Mann, L. (1977) *Decision Making: A Psychological Analysis of Conflict, Choice, and Commitment*. New York: Free Press.
25. Johnson, D., and Tjosvold, D. (1983) "Constructive controversy," In D. Tjosvold and D. Johnson (eds), *Conflict in Organizations*. New York: Irvington.
26. Leont'ev, A.N. (1981) *Problems of the development of the mind*. Moscow: Progress. (松野豊・西牟田久雄)



訳『子どもの精神構造』, 明治図書 1987年)。

27. March, J.G., & Olsen, J.P. (1979) *Ambiguity and Choice in Organizations*, 2<sup>nd</sup> ed., Bergen: Universitetsforlaget.
28. Mettitt, A.C., & Helmreich, R.L. (1996) "Human factors on the flightdeck: The influence on national culture." *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 27 (1), pp.5-24.
29. Mason, R.O., and Mitroff, I.I. (1981) *Challenging Strategic Planning Assumptions*. New York: Wiley.
30. Nielsen, K. (2001) "Institutional Approaches in the Social Sciences: Typology, Dialogue, and Future Challenges," *Journal of Economic Issues*, 35 (2).
31. Parker, I. (1992) *Discourse Dynamics : Critical Analysis for Social and Individual Psychology*. Routledge.
32. Pichering A. (ed.) (1992) *Science as Practice and Culture*, the Univ. of Chicago P.
33. Potter, J.,M. Wetherell, R. Gill, & D. Edwards (1990) "Discourse: Noun, Verb or Social Practice?," *Philosophical Psychology*, 3 (2): pp.205-217.
34. Rees, F. (1998) *The Facilitator Excellence Handbook: Helping People work Creatively and Productively Together*. Jossey-Bass/Pfaiffer. (黒田由貴子訳『ファシリテーター型リーダーの時代』, ビー・ワン・インターナショナル 2006年)。
35. Rouse, W & Morris, N. M. (1985) "On looking into the black box: Prospects and limits in the search for mental models," Center for Man-Machine Systems Research. Georgia Institute of Technology. Report no.85-2.
36. Schwenk, C.R. (1982) "Effects of inquiry methods and ambiguity tolerance on prediction performance," *Decision Science*, (a), 15, pp.449-462.
37. Stoner, J.A.F. (1968) "Risky and cautious shifts in group decisions: the influence of widely held values." *Journal of Experimental Social Psychology*, 4, pp.442-459.
38. Tjosvold, D. (1985) "Implications of controversy research for management," *Journal of Management*, 11, pp.21-37.
39. Thompson, J.C. (1968) "How could Vietnam happen? An autopsy," *Atlantic Monthly*, April, pp.47-53.